

早稲田大学 教育学部
2023 年度 入試問題の訂正内容

＜教育学部 一般選抜＞

【国語】

●問題冊子 10 ページ：設問（二）問十一（1）選択肢ロ

（誤）・・・イメージであるととする見方。

（正）・・・イメージであるととする見方。

●問題冊子 12 ページ：設問（二）問十五 選択肢イ

（誤）・・・のようにな存在となること。

（正）・・・のような存在となること。

以上

早稲田大学 2023年度
一般選抜 教育学部

国
(問 題)
語

2023年度

〈2023 R05170015 (国語)〉

注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～18ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

5. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
7. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ヨナスによれば、テクノロジ―は問題を解決したり全体を調和させたりするものではなく、むしろ、全体に対して絶え間なく不調和を引き起こすものである。その不調和を調整すること自体が、テクノロジ―の進歩の燃料になる。しかしその「フィードバック」もまた新たな不調和を引き起こす。そうして無限に自己増殖していく点にヨナスはテクノロジ―の本質を洞察している。

こうしたテクノロジ―の界限のない自己増殖は、あたかも苔が地面を覆い尽くし、キノコが所狭しと群生していく様子にも似ている。実際に、アーレントもヨナスもこうした特性を持つテクノロジ―を一つの「自然」¹として解釈している。

アーレントはテクノロジ―の本質的な特徴を「オートメーション」のうちに洞察する。テクノロジ―において生産物の制作は新しい生産物の制作を要請するのであり、進歩はテクノロジ―の自己運動によって規定されている。こうした、「自分で動き、したがって意図的で目的を持った介入の範囲外にあるすべての運動過程」が、テクノロジ―の持つオートメーションとしての性格に他ならない。

アーレントによれば、こうした性格はむしろ自然の事物のうちに見出されるものである。そうである以上、テクノロジ―とは自然の力のごときのものであり、テクノロジ―が社会に蔓延していくという事態は、自然が世界を侵食する過程として理解されうる。こうした観点から、²「今日のテクノロジ―は自然力を人間の工作物の世界に流し込むことによって成り立っている」と、アーレントは述べている。

一方、ヨナスもまたテクノロジ―のうちにある種の自然性を洞察している。ヨナスによれば、テクノロジ―の進歩における「相互的なフィードバックの仕組みによって、理論〔科学〕はある新しい必然性の領域を現実にもたらした」のであり、その必然性とは、「理論が人間をその必然性から解放するはずだった第一の自然に代わる第二の自然である」。第一の自然とは、人間が科学的な認識を得る前の状態であり、この状態において人間は生物学的な条件に拘束され、その盲目的な必然性に従属していた。これに対して、「理論」≡科学はそうした条件から人間を解放し、普遍的な認識を得ることを促し、それによって人間を自由にするはずだった。しかし、「理論」はやがて技術と癒合してテクノロジ―になったのである。前述のとおり、テクノロジ―は無限に進歩しようとするのであり、その最中において人間には進歩を停止させるという選択肢などない。つまり、理論は再び人間の自由を否定する必然性と化したのである。ヨナスによれば「この第二の自然に対して、人間は根源的な自然に服従していたように、服従している」のである。

テクノロジ―が自然と化している——そうアーレントとヨナスが言うとき、二人が念頭に置いている「自然」とは、美しく調和の取れた自然などではない。それはむしろ、人間にはコントロールできず、一旦運動が始まったら制御することが不可能であり、際限なくどこまでも増殖していく、理不尽で荒々しい必然性の力に他ならない。

テクノロジ―の定義として一般に語られるのは、テクノロジ―とは科学を応用した技術である、というものだ。テクノロジ―が科学と **A** であることは疑いえない。しかし、この一般的な理解には問題がある。というのもそれは、あたかも科学とテクノロジ―が明確に切り離され、科学がテクノロジ―を必要とせずに成立しうるかのように解釈されるからだ。しかし、アーレントとヨナスはこうした解釈を拒絶し、科学もまたテクノロジ―によって支えられている、というよりもむしろ、科学とテクノロジ―を区別すること自体が不可能であり、科学はそれ自体がある意味でテクノロジ―である、という立場を取る。³

テクノロジ―が何かを作る営みだとしたら、科学は何かを認識する営みである。両者が一致しているのだとしたら、それは「作ること」が「知ること」と同一視され、認識の対象が制作の対象になる、ということを意味している。科学が認識の対象とするのはすべての自然現象だ。そうである以上、科学が同時に技術であるのだとし

たら、すべての自然現象が制作の対象であり、存在するすべてのものが技術的操作の対象である、ということになる。では、そのとき科学Ⅱ技術によって処理されうるように用立てられた存在とは何を意味しているのだろうか。二人はそうした観点から、個別の生産物に注目するのではなく、その背景にある存在論に遡って、テクノロジーが前提としている世界観を描き出していく。

アーレントによれば、テクノロジーを生み出した近代の特徴の一つは、科学の中に実験⁴が取り入れられた、ということである。実験とは、人間が自然の事象を模倣し、実験室のなかでそうした事象を再現することである。実験による再現の可能性が科学的認識の妥当性の条件である以上、科学的な認識は人間が制作可能なものでなければならぬ。それが意味しているのは、人間の知りうるものが、人間に作ることでできるものと等しくなる、ということである。アーレントは次のように述べる。

実験とは、観察さるべき現象を作り出すことであり、したがって、そもそもの最初から人間の生産的能力に依存している。知識を得るために実験を用いるということは、すでに、人間は自分自身が作るものだけを知ることができる⁵と信じていればこそである。この確信は、人間が作らなかった物についても、それらの物が生じてきた過程を突き止め、模倣すれば、それらの物について知ることができる、ということの意味していたのである。よく議論されたことであるが、科学の歴史における重点が、あるものが「なに」であり、「なぜ」あるのかという古い問題から、それが「いかに」生じたかという新しい問題に移動したのは、このような確信の直接的結果であり、したがって、その回答はただ実験においてのみ発見できるのである。実験は、あたかも人間自身が自然の対象物を作ろうとしているかのように、自然過程を繰り返す。

ここで述べられているとおり、実験によって得られる知識は、自然現象が「いかに」生じたか」という問いに答えるものになる。そこで問われているのは、自然現象がどのような要素の組み合わせによって成り立ち、どのような法則によってそうした組み合わせが説明されるのか、ということではない。そしてその組み合わせや法則性は人間が実験によって再現できるものでなければならぬ。したがって、自然科学が対象とする宇宙は、それ自体があたかも **B** であるかのように説明される。アーレントによれば、「現代科学が扱っている宇宙というのは、実験のなかに現れる自然の行動にあわせて解釈され、作業場のリアリティに技術的に翻訳できる原理そのものにあわせて解釈されている」。すなわち、この宇宙は人間の制作能力によって条件づけられ、それを超えるものではない、ということになる。

ヨナスもまた、アーレントと同様に、科学において宇宙全体が技術的なものとして解釈される、と指摘している。ヨナスによれば、自然科学を特徴づけている方法は「分析」である。分析とは、ある自然現象を、それよりも低次の自然現象の複合へと還元していく方法である。こうした方法が科学に適用されるとき、その背景では、あらゆる自然現象が最小の物質によって構成されている、という自然像が前提にされていなければならない。こうした自然像は、「作用をおよぼしている、自然をもっとも単純な力学的諸要素として捉える」ものであり、「これらの要素は、方程式に代入され、結びつけられ、変形されうるような、同じ形式の量的な数値によって表現される」。ヨナスはこうした自然現象の最小の物質への分析を「自然の根源的な存在論的還元⁵」と表現し、ここにテクノロジーの根源が示されていると解釈する。

「自然現象に対する」存在論的分析は、実際のあらゆる応用に先立って、それ自体でテクノロジー的な含意を有している。応用は近代科学の理論モデル像それ自体に付随している操作的な様相によってのみ可能である。事物がその諸要素からどのように構成されているかが示されれば、それによって、そのような諸要素から事物がどのように構成されうるかも、原則的に示されている。制作は、本質的には産出とは異なっており、前

もって存在している素材を組みあわせること、あるいは前もって存在している部品を組み換えることである。これと同様に、科学的認識も本質的には分布の分析、すなわち諸要素が関係しあっている諸条件の分析であって、その諸要素それ自体の本質を把握するという課題に煩わされはしない。諸要素が何であるかではなく、諸要素がそのような特殊な諸条件のもとで、すなわちその関係の組み合わせにおいてどのように振る舞うか——それが科学の追究しうる主題であり、追究すべき主題なのである。

ヨナスは、アーレントと同様に、自然科学における真理の探究を、自然現象が何であるかを問うものとしてではなく、「その関係の組み合わせにおいてどのように振る舞うか」を問うものとして解釈している。そのとき、自然現象はあたかも「制作」されたものであるかのように解釈されるのであり、そうした解釈に基づいて、あらゆる自然が技術的な操作の対象として準備されるのだ。

この二人の立場は、テクノロジーが発動する局面を、テクノロジーの生産物の制作だけに限定せず、科学的な認識の局面にまで遡行させるものである。そしてそれは現代社会に生きる人間にとってテクノロジーから距離を取るがいかに困難であるかを示している。単に製品や機械の使用を止めたり、それらを処分したりしても、テクノロジーから離れることはできない。私たちが、現在の科学的な認識を放棄しない限り、すなわち、何かを知ることが、それが何によって構成されているかを知ることである、という思考法から自由にならない限り、私たちは依然としてテクノロジーのもとに従属し続けていることになるからである。

(戸谷洋志・百木漠『漂泊のアーレント 戦場のヨナス』による)

(注) ヨナス：ドイツ出身の哲学者、一九〇三年～一九九三年。

アーレント：ドイツ出身の哲学者、一九〇六年～一九七五年。大学生時代から長くヨナスと交流があった。

問一 傍線部「こうした特性」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 自然の中の不調和を絶えず調整していこうとする性質。
- ロ 全体として調和している状態と、それを乱す状態との間を揺れ動く性質。
- ハ 生きているかのようにそれ自体で勝手に増えていくような性質。
- ニ 全体としての調和を乱そうとする動きが、際限なく続いていく性質。
- ホ どこまでも際限のない運動を続けていこうとする性質。

問二 傍線部2「こうした観点」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ テクノロジーが、自然環境と人工的な世界とを融合させていく力をもったものとする見方。

ロ テクノロジーが、人間が生活している自然に影響を与え、その自然を次第に損なっていくものであるとする見方。

ハ テクノロジーが、自然環境を人間に必要な人工的に作られた環境へと作り変えていくものであるとする見方。

ニ テクノロジーが、それ自身で動き、広がっていく力によって自ら全体としての調和を作り出していくとする見方。

ホ テクノロジーが、人間の意図や目的通りに動かすことができない自然の力のように広がっていくものとする見方。

問三

空欄

A

に入る四字熟語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 面従腹背

ロ 二律背反

ハ 同床異夢

ニ 同工異曲

ホ 一蓮托生

問四

傍線部3「科学はそれ自体がある意味でテクノロジーである」とあるが、なぜそう言えるのか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 科学は、自然を客観的に認識することを通して、人間にとって有用なものを作ろうとする営みであるため。

ロ 科学は、テクノロジーを支えている多様な技術を生み出すうえで必要不可欠な知識となっているため。

ハ 科学は、テクノロジーと同じく、人間をとりまく自然を作り変えようとする性質をもっているため。

ニ 科学は、対象をどのように作り出せるのかというと考えがその認識の土台となっているため。

ホ 科学は、具体的な技術やテクノロジーの恩恵を人間が受けることによって、はじめてその存在が実感できるものであるため。

問五 傍線部 4 「実験」とあるが、なぜここで「実験」がとりあげられているのか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 実験は、ある対象を作りだすプロセスをなぞるような営みであり、それが対象を知るという確信に結びついているものだから。

ロ 実験は、近代においてある対象を知るために科学に取り入れられたものであり、それによって有用なテクノロジーが数多く生まれたから。

ハ 実験は、人間が自然の事象と同じようなものを作ろうとするものであり、それが科学の発展に大きく寄与したものだから。

ニ 実験は、観察する対象を作り出すような営みであり、それが近代における技術の際限のない広がりにつながっているから。

ホ 実験は、自然の現象を客観的に検証するための行為であり、その検証を通して人間の科学的な確信が生まみ出されているから。

問六

空欄

B

に入る語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 法則に忠実な自然現象

ロ 際限のない不可知の運動体

ハ 増殖を繰り返す自然物

ニ 技術的に制作された人工物

ホ リアリティを欠いた虚像

問七

傍線部 5 「テクノロジーの根源」とあるが、それは何か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 対象を、最小の単位に分解できるようなものとしてとらえ、その単位が自然のこういった対象にも含まれているものとしてとらえること。

ロ 対象を、人間によって変形できる単位のようにとらえ、その単位が多寡によって対象の性質をとらえようとする事。

ハ 対象を、似たような形式の最小単位を組み合わせ、操作することで作り出されるものとしてとらえようとする事。

ニ 対象を、変化しない同一の要素の組み合わせとしてとらえ、その組み合わせを自然そのものの本質ととらえる事。

ホ 対象を、数値のような単位の組み合わせや数式によってあらわされるものとしてとらえ、人間に役立つものに変えようとする事。

問八 傍線部 6 「テクノロジーから距離を取ることがいかに困難であるか」とあるが、それはなぜか。その理由

として本文の説明と合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ テクノロジーは、人間の科学的な認識の仕方そのものと分かちがたく結びついたものであるため。

ロ テクノロジーが人間の日常生活に広く浸透しており、その技術がなくなれば生活の利便性が大きく損なわれてしまうため。

ハ テクノロジーは、対象を作るように理解する科学的な認識の仕方によって生み出されているため。

ニ テクノロジーが、自然の力のように変化しつつ増え広がり、まわりの世界に深く浸透しているため。

ホ テクノロジーは、対象を似通った単位に分けたり、組み合わせたりする認識の仕方と不可分な関係をもっているため。

(二)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

¹ 主観的に経験される世界を神経表象に還元しようとする見方にとって、もつとも収まりが悪いのは身体である。自己の身体は、主観的に経験される私の現象空間と、他者が経験している現象空間とが一致する場所に現れるからである。次のような場面を考えてみるといい。あなたは、しばらく前から右肘のあたりにかゆみを感じていて、思わず左手がそこに伸びて掻いている。ところが、かゆみを感じる部位は腕を回してもちようど見えないので、友人に見てもらった。友人はそこに蚊に刺された跡のような、小さい赤い腫れを見つけ、「ここ？」と言いがら押さえてくれたが、それはまさにあなたが先ほどからかゆみを感じているその場所だった。

神経構成主義の前提を拡大し、他者もまた脳を持つ存在として、物質的世界から受け取った刺激をもとにして構築された世界の表象を保持していると考えてみよう。この場合、私が経験している主観的な世界の表象と同様に、他者の脳もまた、世界についての表象を生み出している。ただし、私が出会うことができるのは、私の世界に現れる他者の表象であって、他者の脳そのものではない。ましてや、他者の脳の内部で構成されている世界像には接近するべきがない。自己の脳と他者の脳はそれぞれ、物質的世界に由来する刺激をもとに、それぞれの世界をそれぞれのしかたで構築しているのであり、別々の世界に閉ざされたしかたで存在することになる。

² ところが、私の身体は、まさにこうした考え方を否定するしかたで存在する。私がかゆみを主観的に経験している空間的位置と、そのかゆみを生じさせている物理的刺激（虫刺され）の空間的位置は一致している。加えて、物理的刺激が生じている空間的位置は、他者から見ても正確に同じ場所に特定することができる。私がかゆみを知覚している私の身体上の一点と、友人が赤い腫れを知覚している私の身体上の一点は、空間中の同じ位置として共有可能なしかたで、それぞれの世界に出現しているのである。

現象学ではしばしば、かゆいと感じる部位を掻く経験のように、知覚と行為を通じて主観的に経験しているとこの身体をライブ（Leib 生きた身体 lived body）、他のさまざまな物体と同じように空間内の一対象として物理的に現れる身体をケルバー（Körper 物理的身体 physical body）として区別する。私が経験している自己の身体そのものがライブとしての側面とケルバーとしての側面を持つが、それらは空間的に別々のしかたで存在するのではなく、重なり合うしかたで存在する。私はかゆみをライブの空間的広がり的一点において感じるが、友人は、ケルバーとして現れている私の身体的一点に、かゆみの原因になる赤い腫れを見出す。そして両者は、空間中の同じ位置に重なり合うのである。

神経構成主義からすると、かゆみや痛みの感覚が生じるのは、脳内に構築される身体表象においてであって、それが脳の外部へと投射されることであたかも脳の外側でそれらの感覚が生じているのかのように感じられる、という説明になる。私たちが経験しているのは基本的にライブであって、ケルバーは投射を通じて再構成されたものでしかない。したがって、ライブとして経験される私の身体の空間性が、ケルバーとして現れる私の身体の空間性と一致するとは限らないことになる。とくに、そのケルバーを他者が知覚する場合には、両者の空間的な一致はまったく保証されない。

ところで、四肢の一部を失った当事者がしばしば経験する「幻肢」の現象は、一見すると神経構成主義の見方を支持する証拠であるように思われるかもしれない。幻肢にはしばしば痛みの感覚がともない、もともと腕や脚のあった空間に本人はその痛みを定位することができるものの、その空間にはケルバーは存在しないし、他者から見ても痛みの原因になるような何かがそこに存在するわけではない。この現象だけを取り上げると、主観的に感じられる身体の空間性は決して物理的な次元に根拠を持つていてはではなく、たんに脳内で構築されている表象である、さらに言うなら、身体そのものが脳によって生み出された表象であって実体がないのだ、とも言えるのである。実際、神経科学者のヴィラヤヌル・ラマチャンドランは、幻肢に則してその種の考えを明確に示している。

しかし、私たちの経験する身体がもと脳が生み出した表象でしかないとすると、そもそも最初からそれはケルパーとして空間的広がりを用意していなくてもよいのである。他の物体と同じように空間中に現れる必要がないし、ライブとケルパーが空間的に対応していることそれ自体が、ここでは最初から問題にならない。³幻肢を根拠として身体を神経表象に還元する見方は、ケルパーを主観的経験の外部に押しやってしまうため、ライブとケルパーの不一致として認識される幻肢を、かえって認識不可能な現象にしてしまうのである。幻肢が幻肢として認識されるのは、そもそも、脳内の表象に還元されない、四肢の主観的な空間的広がりを、私たちがもとと知っているからに他ならない。

私たちの主観的経験は、脳内だけに収まっているわけではなく、外部の空間へと広がるしかたで受肉している。別の言い方をすると、意識は、脳内に閉ざされているわけでも外界と別の次元にあるわけでもなく、身体化され、世界へと埋め込まれている。

先の場面で、私と友人という二人の人物が登場していたことに留意しておこう。身体性を重視するなら、主観的に経験される世界は、たんに「自己」について論じて話が閉じる構造にはなっていない。というのも、私が「私の身体」として経験しているものは、ケルパーとしての側面を介して他者の経験する世界に登場するし、逆もまた同様だからである。誕生して間もない新生児を思い浮かべてみよう。新生児はきつと、寒いか空腹だとか不快だとか、自己の身体内部に由来するさまざまな出来事をカン^a欠的に経験している。その一方で、母親や父親のような養育者の身体、とくにその顔に頻繁に会合っている。新生児は、ケルパーとして現れる自己の顔を知るようになるずっと前に、他者の顔に出会うのである。

しかも、そのような場面で新生児模倣が生じる。新生児模倣とは、舌を突き出す、口を開くといったしかたで呈示された大人の表情を新生児が模倣する現象である。模倣といっても、新生児は特定の表情を意図的に模倣するわけではなく、たんに共鳴的に反復しているだけである。⁴しかし、そうであるからこそ、自己の身体（自己のライブ）は他者の身体（他者のケルパー）と最初から絡まり合って経験されているとも言える。新生児は、他者の顔を物体と同じしかたで知覚しているわけではなく、同じ表情を自己の顔に引き起こしうる特別な物体として知覚しているのである。

そう考えると、私が「自己の身体」として経験しているこの身体も、もともときわめて社会的なしかたで構成されているに違いない。生物学的に、あるいは生理学的に見れば、自己の身体は一定の範囲で個体として閉じたシステムを形成している。たとえばタイ^b謝や免疫といった現象に沿って見れば、身体は安定した個体として機能しているだろう。しかし、知覚と行為を出発点にしてとらえると、身体はつねに他者の身体とのあいだで相互的な関係に置かれている。新生児に限らず、大人になっても、他者の身体が何らかのしかたで知覚できる場面では、私たちはそれに知らず知らずのうちに何らかの行為で応じてしまう。たまたま電車に乗り合わせた人たち同士でも、私たちはお互い自然に距離を取り、立ち位置や座席間隔を調整し、視線をあまり合わせないようにふるまっている。

哲学者メルローポンティは、他者の身体を知覚することが自己の身体において何らかの行為やその可能性を誘発し、逆に自己の身体が他者において何らかの行為やその可能性を誘発するような相互的な関係を「間身体性（intercorporeité）」と呼んだ。私たちは、「自己の身体」と「他者の身体」を明示的に区別できるようになる以前から、このような相互的な関係を生きているし、個体化された自己の身体を経験できるようになった後も、この関係は身体の根底ではたつき続いている。だから、身体性から出発して自己について考えることは、身体を介して他者について考えることに通じているし、他者について論じることなく自己についての議論は閉じられない。

ライブとして私が経験しているところの自己の身体は、それがケルパーとして私自身に現れるようになる前に、ケルパーとして私の世界に現れる他者の身体と深く絡まり合っている。⁵むしろ、私が自己の身体を、物体と同じようにケルパーとして把握することができるようになるのは、他者の身体との出会いを介してである。その意味

で、自己の身体は、たんに自己による主観的な経験の領域に閉じているわけではなく、最初から他者と共有される間主観的な領域で構成される。これはたんに身体の問題ではない。意識が身体化されているという先の論点と合わせて考えるなら、意識は身体を介して、他者と共有される世界へと接続しているということを意味するのである。

(田中彰吾『自己と他者 身体性のパースペクティヴから』による)

問九 傍線部 a「カン欠的」と同じ漢字を使う言葉を次の中から選び、解答欄にマークせよ。

イ カン板 ロ カン性 ハ 達カン ニ カン破 ホ 民カン

問十 傍線部 b「タイ謝」と同じ漢字を使う言葉を次の中から選び、解答欄にマークせよ。

イ タイ感 ロ 応タイ ハ 世ダイ ニ タイ破 ホ 容ダイ

問十一 傍線部 1「主観的に経験される世界を神経表象に還元しようとする見方」として、もつとも収まりが悪いのは身体である」について、次の二つの問いに答えよ。

(Ⅰ)「主観的に経験される世界を神経表象に還元しようとする見方」とはどのような「見方」だと思われるか。本文全体を踏まえて考え、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 自己の身体が経験することは、いかに主観的であつても他者の経験と一致するとする見方。

ロ 自己の経験は自己の外部世界に根拠を持たず、すべて脳が創り出したイメージであるとする見方。

ハ 自己のかゆいとイメージする場所と他者が差し示す場所とが一致するように、身体に関する認識は一致するとする見方。

ニ 自己の脳の生み出すイメージと他者の脳が生み出すイメージとが、自己の脳の生み出すイメージにおいて一致するとする見方。

ホ 自己が自己完結した脳のイメージを持つように他者も自己完結した脳のイメージを持つとする、自己も他者もイメージにすぎないとする見方。

(Ⅱ)「主観的に経験される世界を神経表象に還元しようとする見方」として、もつとも収まりが悪いのは身体である」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ある人の身体が経験していることを他者も知ることができるから。

ロ 身体は主観的に経験されているのに、他者の主観的に取り込まれてしまうから。

ハ 自己と他者はそれぞれの脳で世界を表象化しているが、身体だけは表象にならないから。

ニ 自己の脳内で特定されるかゆい場所が、他者によって物理的に指し示されてしまうから。

ホ ある人の脳内に生み出された身体表象は、他者の脳内に生み出された身体表象と同じだから。

問十二 傍線部2「ところが」とあるが、何と何とが逆接の関係にあるのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 自己の身体のかゆい場所を他者が脳の内部に閉ざされた表象として指し示すことができることと、他者が私のかゆい位置を物理的刺激を手がかりに特定できること。

ロ 自己の身体は自己のケルバーと表象空間において出会うことが可能であることと、私たちが経験するライプとしての身体とケルバーとしての身体とが一致しないこと。

ハ 神経構成主義の前提を拡大すれば私の脳の表象は他者の脳の表象に出会うことができないという事実と、現実には私の脳は他者の脳をケルバーとして認識してしまうこと。

ニ 神経構成主義の前提を拡大すれば自己のかゆみは自己完結した形でイメージ化されているはずであることと、実際には自己のかゆい位置は自己と他者とで共有されていること。

ホ 神経構成主義の立場に立てば他者は私のかゆい場所を指し示すことができるはずであることと、現実には身体は世界に別々に存在していて自己の身体と他者の身体とは相互関係にないこと。

問十三 傍線部3「幻肢を根拠として身体を神経表象に還元する見方は、ケルバーを主観的経験の外部に押しやってしまったため、ライプとケルバーの不一致として認識される幻肢を、かえって認識不可能な現象にしてしまうのである」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 身体が脳内の表象にすぎないとすると、そもそも幻肢という現象は起きえないことになるから。

ロ 主観身体を脳内だけの現象だとするなら、もともと脚があったこと自体が問題となり得ないから。

ハ 身体が実体ではなく表象ではないことを幻肢だけで説明したら、身体の肉体としてのあり方を理解できなくなるから。

ニ 幻肢をもともと身体は神経表象であって実体がないのだと説明したなら、身体が世界に埋め込まれていることが認識できなくなるから。

ホ 幻肢における脳内表象を根拠として身体は神経表象としたのでは、幻肢の「失われた脚があるように感じる」感覚が説明できなくなるから。

問十四 傍線部4「しかし」とあるが、何と何とが逆接の関係にあるのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 新生児模倣を単なる体の反応であると捉えることと、新生児模倣を他者への応答だと捉えること。

ロ 新生児模倣を閉じたシステム内の現象だと捉えることと、新生児模倣をライプの混乱と捉えること。

ハ 新生児模倣を養育者の表情の模倣であると捉えることと、新生児模倣を社会的反応であると捉えること。

ニ 新生児模倣を主観的に経験された世界だと捉えることと、新生児模倣を様々な出来事の一つだと捉えること。

ホ 新生児模倣を自己のライプを介して他者を認識することだと捉えることと、新生児模倣を単なる模倣だと捉えること。

問十五 傍線部5「私が自己の身体を、物体と同じようにケルバーとして把握することができるようになるのは、他者の身体との出会いを介してである」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人は生物学的・生理学的に閉じられた系だが、それが他者との相互的な応答関係を経て、安定した物体のようにな存在となること。

ロ 人は新生児模倣によって他者認識を獲得するので、その根底的な相互関係を支えていたライブを特別な物体として把握していること。

ハ 人はライブとして他者と応答する前にすでにケルバーとして他者と応答しており、ライブより先にケルバーを自己として把握すること。

ニ 人は新生児の時に単なるケルバーとしての自己を通して他者を模倣するが、その体験が世界におけるライブとしての自己を形成すること。

ホ 人はケルバーとして他者と相互の関係を構築することを通して、自己の身体を他者にも認識できるモノと同じように空間的広がりをもって世界に存在するのだと把握すること。

問十六 この文章の趣旨はどこにあると考えられるか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人の身体は、世界に空間的広がりをもって存在している。

ロ 神経構成主義は、世界の存在を認めない点でまちがっている。

ハ 自己の脳と他者の脳は互いに互いを表象として構築している。

ニ 人の意識は世界から超越しているのではなく、世界の中にある。

ホ 人は閉じられたシステムによってではなく、相互的な関係によって安定する。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

この北の方と申すは、故中御門の新大納言成親卿の御娘なり。容顔世にこえて、心の優なる事も、世の常にはあり難かりければ、なべての人にみせむ事いたはしく思はれて、「女御・后にも」とぞ父母思ひ給ひける。かく聞こえければ、これを聞く人、「あはれ」と思はぬはなかりけり。法皇、このよし聞こしめして、御色にそめる御心にて、忍びて御書ありけれども、これもよしなしとて、御返事も申させ給はず。

雲井より吹きくる風のはげしくて涙の露のおちまざるかな(X)

と、口すさび給ひけるこそ **A**。父成親卿、法皇の御書のあるよし聞き給ひて、あわて悦び給へども、姫君聞き入れ給はねば、「親のため不孝の人にておはしけるを、今まで父子の義を思ひけるこそ **B**。今日より後は父子の契り離れ奉りぬ。かの方へ人行き通ふべからず」とのたまひければ、上下おそれ奉りて、通ふ人もなし。乳母子に、兵衛佐と申しける女房一人ぞ、わづかにゆるされて通ひける。これに付けても、姫君、世の憂き事をぞ、御もとゆひにてすさび給ひける。

むすぶつる情けもふかきもとひにはちぎる心はほどもやせむ(Y)

と書きすさみて、引き結びて捨て給へり。兵衛佐、これを見て後にこそ、思ひある人とは知りにつけ。色に出でぬる心の中をいかでか知るべき」と、やうやうに諫め申されけるは、「女の御身と成らせ給ひては、かやうの御幸ひをこそ、神にも祈り仏にも申してあらまほしき御事にて候へ」と申しければ、姫君、御涙をおさへて、「我が身につきせぬ思ひの罪深ければ、なにこともよしなきぞとよ」とて、引きかづきて臥し給ひぬ。兵衛佐、又申しけるは、「幼くより立ち去る方もなくこそ、なれ宮仕へ奉りつるに、かく御心をおかせ給ひけるこそ心うけれ」と、さまざまによもすがらうらみ奉りければ、姫君、理にまけて、「ありし殿上の淵酔に見初めたりし人の、ひたすら穂にあらはれて言ひし事を、聞かざりけれど、この世ならぬ心の中を知らせたりしかば。いかばかり、かくと聞かば歎かむずらむと思ひてぞよ」とのたまへば、「小松殿こそ申させ給ふと聞きしか。さてはその御事にや」とて、兵衛佐、小松殿へ参りて、しかしかの御事なむ申しければ、三位中将、「さる事ありき」とて、忍びていそぎ御車を遣はして、迎へ奉りてけり。

(注) 小松殿…三位中将平維盛のこと。平清盛の孫。

殿上の淵酔…宮中で正月・五節などの後に、天皇臨席のもとに清凉殿で殿上人が催した酒宴。

(延慶本『平家物語』による)

※和田掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

延慶本注釈の会編(佐伯真) 延慶本平家物語全注釈

延慶本平家物語全注釈 第三末(巻七) pp.388-392, 2013年発行 汲古書院

問十七 空欄 **A** **B** に入る語として、最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ うつくしけれ □ くやしけれ ハ いやしけれ ニ やさしけれ ホ おそろしけれ

問十八 傍線部 a・c の「奉り」の敬意の対象として、最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。(同じものを複数回選択してもよい。)

イ 法皇 □ 成親卿 ハ 小松殿 ニ 姫君 ホ 兵衛佐

問十九 傍線部1「色に出でぬる心の中」とはどのような思いか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 自分は罪深いという思い。
ロ 父の冷たさを恨みに感じている思い。
ハ 世の中ははかないものだという思い。
ニ すでに愛する人がいるのだという思い。
ホ 法皇からの愛は畏れ多くて受けられないという思い。

問二十 傍線部2「かく御心をおかせ給ひけるこそ心うけれ」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 姫君がこれほどあの方にお心を傾けていらつしやるご様子なのは、残念に思われます。
ロ 姫君に法皇様がこんなに執着していらつしやるご様子なのは、大変残念に思われます。
ハ 姫君がこのように父上様から疎まれて勘当されておられるのは、大変困ったことです。
ニ 姫君がこのように私に対して心の隔てを置いていらつしやるのが、大変つらいことです。
ホ 姫君がこのように罪ふかき身であることに悩んでおられるさまを見ると、痛ましく思われます。

問二十一 傍線部3「見初めたりし」4「聞かざりけれ」の主語として、最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。(同じものを複数回選択してもよい。)

- イ 法皇 ロ 成親卿 ハ 小松殿 ニ 姫君 ホ 兵衛佐

問二十二 傍線部5「この世ならぬ心の中」とはどのような思いか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 小松殿への深い愛情。
ロ 法皇の姫君への深い愛情。
ハ 成親卿の姫君への深い愛情。
ニ 成親卿に勘当された深い悲しみ。
ホ 法皇の愛情を拒絶しなければならないことへの畏れ。

問二十三 (X)の和歌「雲井より吹きくる風のはげしくて涙の露のおちまさるかな」の中の「風」とは何をさしているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 御書 ロ 御返事 ハ 父母 ニ 成親卿 ホ 世の人

問二十四 (Y) の和歌「むすびつる情けもふかきもとひにはちぎる心はほどこめやせむ」について、次の問いに答えよ。

(I)「むすびつる」相手として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 法皇 ロ 成親卿 ハ 小松殿 ニ 姫君 ホ 兵衛佐

(II)「ほどこめやせむ」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ほどこてしまおうか、どうしようか。

ロ ほどこてしまおうのではないか、どうだろうか。

ハ ほどこめしようか、いやほどこけるはずがない。

ニ ほどこてくれるといいのだが、どうだろうか。

ホ ほどこでもしたらどうしようか、困ってしまう。

問二十五 『平家物語』と同じく、鎌倉時代に成立した軍記物語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 義経記 ロ 太平記 ハ 陸奥話記 ニ 承久記 ホ 応仁記

(四) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。

張虞卿者、居^ニ西京伊陽県小水鎮^ニ。得^{タリ}古瓦瓶^ヲ於土
中^ニ。色甚^ダ黒^シ。頗^ル愛^ス之^ヲ。置^キ書室^ニ。養^フ花^ヲ。方^{あたリテ}冬^ニ。極^{メテ}寒^シ。一夕¹忘^ル
去^ル水^ヲ。意^フ為^ニ凍裂^{センコトヲ}。明日^ニ視^ル之^ヲ。凡^ソ物^ノ有^ル水者皆凍^ル、
独^リ此瓶^ノ不^レ然^ラ。異^ニ之^ヲ。試^ミ注^グ以^テ湯^ヲ。終日^ニ不^レ冷^メ。張或^{あるトキト}与^レ客
出^ル郊^ニ。置^ク瓶^ヲ於^ハ篋^ニ。傾^ケ水^ヲ。淪^{ヤクスルニ}茗^ヲ。皆^ニ如^シ新沸^者。自^リ是^{メテ}始^{メテ}知^ル
秘^{タルヲ}惜^ム。後⁴為^ル醉僕^ニ。触^ル碎^ル。視^ル其^ノ中^ヲ。与^ニ常^ノ陶器^等。但^ダ夾底⁵
厚^{サほとんど}幾^ニ二寸[、]有^リ鬼^ノ執^{トリテ}火^ヲ以^テ燎^{ヤク}。刻^ハ画^ヲ甚^ダ精^シ。無^ク人^ノ能^ク識^ス其^ノ
為^ハ何^ノ時^ノ物^ノ也[。]

(注) 張虞卿…宋の真宗朝の宰相張齊賢(九四三年～一〇一四年)の子孫。

西京伊陽県小水鎮…河南省洛陽にある地名。

淪茗…茶をいれること。

秘惜…愛惜すべき珍品をいう。

問二十六 傍線部1「忘去水」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 寒さを忘れて給水に行った。
ロ 瓶の水を棄てるのを忘れた。
ハ 水から花を取るのを忘れた。
ニ 忘れて瓶の水を棄てさった。
ホ 水汲みに行くことを忘れた。

問二十七 空欄 X に入る最も適切な文字を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 他 ロ 古 ハ 動 ニ 彼 ホ 廢

(宋の洪邁『夷堅志』による)

※各田舎に際し、以下のとおり出典を追記しております。
夷堅志 伊陽店 夷堅志 記注 甲巻下 二三八―二九九頁 二〇一五年発行 汲古書院

問二十八 傍線部 2 「異之」とあるが、その意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ この瓶の不具合を詰った。
- ロ この瓶の真贋を疑い質した。
- ハ この瓶の様子を不思議がった。
- ニ この瓶の使い方に異議を唱えた。
- ホ この瓶の尋常でない効用を難じた。

問二十九 傍線部 3 「如新沸者」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 新しい沸かし方のようにであった。
- ロ 沸かしはじめのようであった。
- ハ 間もなく沸いたようであった。
- ニ 手早く沸かしたようであった。
- ホ 沸かしたてのようであった。

問三十 傍線部 4 「後為酔僕触碎」の意味をよく考え、「僕」の字の後に補い得る最も適切な漢字一字を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 令
- ロ 以
- ハ 而
- ニ 所
- ホ 見

問三十一 傍線部 5 「無人能識其為何時物也」の書き下し文として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ひとのそれをよくしりてためにいづれのときのものもなきなり
- ロ ひとのよくそれをしりてためにいづれのときのものもなきなり
- ハ ひとなくしてよくそのいづれのときのものなるかをしれるなり
- ニ ひとのよくそのいづれのときのものなるかをしるなきなり
- ホ ひとなくしてそのいづれのとくなるかをよくしるものなり

問三十二 この張虞卿の「瓶」についての解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 壊れて出現した底部の火を焚^くべる鬼を刻した画は、一見陳腐で取り柄^えのないこの瓶を「秘惜」に変えた一大発見と理解される。
- ロ 底部にある火を焚べる鬼の画は、外見からは予想もつかない精密さで、「秘惜」にふさわしい不可視の工芸装飾と評価される。
- ハ 変哲のない瓶だが、底部の火を焚べる鬼の画はあの世の苦役を描いたもので、「秘惜」たる瓶が冥界に由来することを示している。
- ニ 土中から掘り出されたものだが、不思議な機能よりも底部の火を焚べる鬼の細密な画が調度品として「秘惜」の価値を増している。
- ホ 一見通常の陶器と同じだが、底部にある火を焚べる鬼の細密な画はこの瓶に潜んだ「秘惜」の効能を生む仕掛けであったと推測される。

〔以下 余白〕